Japanese Journal of Social Motivation vol. 9 2018
原著論文

接近－回避気質尺度（ATQ）日本語版の作成

柿沼　亨祐（同志社大学大学院心理学研究科）
田中　あゆみ（同志社大学心理学部）

Development of Japanese Version of Approach-Avoidance Temperament Questionnaire (ATQ)

Kyosuke Kakinuma. *Graduate School of Psychology, Doshisha University*
Ayumi Tanaka. *Faculty of Psychology, Doshisha University*

要　約

本研究は接近－回避気質尺度（Approach-Avoidance Temperament Questionnaire: ATQ）日本語版の作成と，その信頼性・妥当性の検討を行った。分析の結果，ATQ日本語版は高い再検査信頼性を備えることが確認された。妥当性の検討として，接近－回避気質と近接した構成概念であるBIS/BASとの関連を調べた結果，接近気質とBASの間に中程度の正の相関，回避気質とBISの間に中程度の正の相関がみとめられた。さらに，他の概念的・行動的な変数との関連を検討した結果，接近気質が高いほど，自尊心，楽観性，挑戦的な人物の評価，保守的な人物の評価が高く，回避気質が高いほど，自尊心，楽観性，挑戦的な人物の評価が低いことが明らかとなった。また，BIS/BASとそれら4つの変数との関連と，接近－回避気質と4つの変数との関連を比較した。その結果，接近－回避気質はそれらの変数とより強く関連していることが示された。以上により，ATQ日本語版が，高い信頼性と妥当性を備えており，実用的な尺度であることが示された。

キーワード：接近－回避気質，信頼性，尺度開発，妥当性

Abstract

In the current study, we developed a Japanese version of the Approach-Avoidance Temperament Questionnaire (ATQ) and investigated its reliability and validity. Results showed that the Japanese version of the ATQ has test-retest reliability. In measuring validity, we examined the relationships between approach-avoidance temperament and BIS/BAS, and results showed that there are moderate correlations between approach temperament and BAS and avoidance temperament and BIS. Moreover, we examined the relationships between approach-avoidance temperament and other conceptual and behavioral variables. Results revealed that the higher the approach temperament, the higher the self-esteem, optimism, challenging person evaluation, and conservative person evaluation, while the higher the avoidance temperament, the lower the self-esteem, optimism, and challenging person evaluation. Furthermore, we compared the relationship between BIS/BAS and these variables to the relationship between approach-avoidance temperament and these variables. Results showed that approach-avoidance temperament was related with these variables more strongly than BIS/BAS was. Overall, the current study suggested that the Japanese version of ATQ has sufficient reliability and validity and that it is a practical scale.

Keywords: approach-avoidance temperament, reliability, scale development, validity.

発達の早期からみられ，生涯を通して安定した，生物学的・遺伝的基盤を有する行動傾向を気質という（Goldsmith et al., 1987）。Elliot & Thrash（2002, 2010）は，外向性/神経症傾向（Eysenck, 1981）・ポジティブ情動性/ネガティブ情動性（Tellegen, 1985）・BIS（Behavioral Inhibition System）/BAS（Behavioral Activation System; Gray, 1987）といった気質の概念を「接近気質」と「回避気質」という2つの因子にまとめ，それを測定する接近－回避気質尺度（Approach-Avoidance Temperament Questionnaire: ATQ）を開発した。本研究では，このATQの日本語版を作成し，信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

Elliot & Thrash（2002）は，外向性/神経症傾向・ポジティブ情動性/ネガティブ情動性・BIS/BAS のそれぞれの構成概念は人間の異なる特性を表すものの，これら3つは生物学的な基盤を有する点，バレンス（valence）をもつ基本的なパーソナリティである点において共通していると述べた。実際に，いくつかの研究により，外向性・ポジティブ情動性・BASの間，神経症傾向・ネガティブ情動性・BISの間には正の関連があることが示されている（e.g., Carver, Sutton, & Scheier, 2000; Tellegen, 1985）。したがってElliot & Thrash（2002）は，概念的な面と実証的な面の両方の観点から，それぞれ3つの構成概念はオーバーラップしていることを指摘し，それぞれ3つの概念を体系づけ，統合するための中心的な概念として接近－回避気質を提唱した。

接近気質とはポジティブな刺激（i.e. 報酬）に対する全般的な神経生物学的感受性であり，そのような刺激に対する知覚の覚醒，感情的な反応，行動傾向を含むと定義される。一方，回避気質とはネガティブな刺激（i.e. 罰）に対する全般的な神経生物学的感受性であり，そのような刺激に対する知覚の覚醒，感情的な反応，行動傾向を含むと定義される（Elliot & Thrash, 2002）。この気質に反映される接近と回避動機づけは，生物が利得のある刺激に近づき，害のある刺激から離れるという，環境への適応をつかさどる（Tooby & Cosmides, 1990）という点で，生物にとって最も基本的な心理的機能の1つである。さらに接近と回避の区別は，感情的・認知的・行動的な研究にとって基盤となる不可欠なものである。以上のように接近－回避気質の概念は，パーソナリティに対する一見すると多様なアプローチを集約するという点，そしてポジティブ・ネガティブな刺激に対する全般的な反応傾向であり，パーソナリティや動機づけの核となる点で意義がある（Elliot & Thrash, 2002）。

Elliot & Thrash（2010）は，接近気質・回避気質を測定するための尺度の開発を行った。予備調査によって，項目プールから，内容（e.g., 情動的反応，知覚，行動傾向）と，心理測定的基準（e.g., 内的整合性）に基づいて12項目（接近気質6項目，回避気質6項目）を選択し，接近－回避気質尺度（ATQ）を作成した。

ATQは，外向性/神経症傾向尺度・ポジティブ情動性/ネガティブ情動性尺度・BIS/BAS尺度と以下のような相違点がある。外向性/神経症傾向尺度との違いとして，外向性項目のほとんどは社交性に焦点を当てているが，接近気質の項目は全般的である。神経症傾向の項目の多くは，ネガティブ感情を経験する頻度に焦点を当てているが，回避気質は頻度ではなく，感情の反応性に焦点を当てている。ポジティブ/ネガティブ情動性の項目との違いは，この尺度項目は，感情に焦点を当てているが，接近－回避気質の項目は感情だけでなく，認知や行動にも焦点を当てている。最後に，BIS/BAS尺度との違いに関して，BASには下位尺度が存在し，多次元的であるが，接近気質は下位尺度がなく単次元的である。さらに，BASの項目は特定のポジティブな経験に焦点を当てているが（e.g., fun），接

近気質の項目はすべて一般的な事象に焦点を当てている。以上の点から，ATQはより全般的なポジティブ・ネガティブ刺激に対する知覚の覚醒，感情的な反応，行動傾向を表しており，下位尺度がなく項目数が少ないという点からより利便性を備えているといえる。

本研究の目的

本研究はATQ日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討を行う。まず，因子分析によって，原版の因子パターンを再現できているかどうかを確認する。さらに2週間の間隔を空けて再検査信頼性を確認する。また，近接する構成概念との関連を調べ，妥当性の検討を行う。Elliot & Thrash（2010）では，外向性/神経症傾向，ポジティブ情動性/ネガティブ情動性，BIS/BASとの関連について検討がなされたが，本研究ではその中でも，接近－回避気質と同じく動機づけを扱っており，項目がより近似しているBIS/BASとの関連に焦点をあて検討を行う。接近気質はBASと，回避気質はBISと中程度の正の相関があると予測する。

さらに，妥当性の検討として，本研究は接近－回避気質と他の概念的・行動的な変数との関連についてより詳細な検討を行う。Elliot & Thrash（2010）は，接近－回避気質と達成目標や成績との関連を示しているのみであり，十分な検討が行われているとは言いがたい。そこで本研究は接近－回避気質と以下に述べる4つの変数との関連について検討を行う。

尾崎・唐沢（2011）は，目標における焦点状態の違い（制御焦点理論; Higgins, 1997）として，利得に焦点化した自己制御傾向（促進焦点）と，損失に焦点化した自己制御傾向（予防焦点）が，自尊心と関連していると報告している。促進焦点の場合は肯定的な結果に対して敏感に反応する傾向があるため，自己評価についても肯定性次元に強く注目し，自尊心が高い。一方，予防焦点の場合は，否定的な結果に対して敏感に反応する傾向があるため，自己評価の否定性次元に強く注目し，自尊心が低いと述べられている。制御焦点は，理想とする自分（ideal guides）や，そうであるべき自分（ought guides）といった自己の表象（セルフガイド（self-guides）; Higgins, 1987）に由来し，社会化により形成されるものと位置づけられる概念だが，接近－回避気質は，接近－回避という根本的な心理プロセスに由来し，生物学的な基盤が想定されるという違いがある（Elliot & Thrash, 2010）。しかし両者は，動機づけ的な傾向を表している点，ポジティブ・ネガティブといったバレンスを持つ点で類似していることから，接近－回避気質と自尊心のあいだに同様の関係が予測できる。つまり，ポジティブな刺激への感受性である接近気質の場合は，自己評価の肯定的な側面に注目するため，自尊心は高く，ネガティブな刺激への感受性である回避気質の場合は，自己評価の否定的な側面に注目するため，自尊心は低いと考えられる。

さらに，本研究では楽観性との関連についても検討を行う。これまでの研究から，BASの値が高いほど日常的によりポジティブな感情を感じ，BISの値が高いほど日常的によりネガティブな感情を感じること（Gable, Reis, & Elliot, 2000），BASの値が高いほど，ポジティブな経験をしたときに，よりポジティブな感情を感じること（Updegraff, Gable, & Taylor, 2004）が明らかとなっている 。さらに，Updegraff et al.（2004）は，接近や回避の動機づけは状況に対する要求や反応の仕方，そして経験の解釈や価値づけに影響を与える可能性を示唆している。このように，接近や回避の動機づけが現在の状況の解釈の仕方に影響を及ぼすのであれば，同様に将来の状況についての思考傾向にも影響を与える可能性がある。したがって，悪いことよりも良いことが生じるだろうという信念である楽観性は，接近気質と正の関連，回避気質と負の関連があり，悪い結果を予測する傾向である

悲観性は，接近気質と負の関連，回避気質と正の関連があると予測する。

本研究ではより行動的な変数との関係についても調べる。制御焦点と人物評価の関係を調べたHamstra, Van Yperen, Wisse, & Sassenberg（2013）では，目標の方向性が一致すると，その人物への評価が高くなると述べられている。つまり，促進焦点傾向の高い人は挑戦的な人物を好み，予防焦点傾向の高い人は保守的な人物を好む。前述のように制御焦点と接近－回避気質の概念の類似性を考慮すると，接近気質の高い人は，ポジティブな事象の獲得に価値を置く挑戦的な人物をより好ましく評価し，回避気質の高い人はネガティブな事象の回避に価値を置く保守的な人物をより好ましく評価する可能性がある。

評価傾向の違いが人物以外の刺激にも生じるかどうか調べるため，本研究では反応刺激として多く用いられる文字の評価（Ogawa & Suzuki, 2004）との関係についても検討を行う。Rusting（1998）によれば，ポジティブ・ネガティブなバレンスをもつパーソナリティ特性は，それぞれの感情に関係する記憶や認知で構成された認知ネットワーク（感情ノード）を発達させ，その結果，人は特性と一貫した形で刺激の知覚や解釈をしやすくなる。実際に，Gomez & Gomez（2002）は，BASの値が高いほど，文字の空所補完課題（e.g., a n g_ _）においてポジティブな単語になるように文字を補完して単語を完成させた数や，単語の再生課題におけるポジティブな単語の再生率が高い一方で，BISの値が高いほど，ネガティブな単語になるように文字を補完して単語を完成させた数・ネガティブな単語の再生率が高いことを示している。また，Strachman & Gable（2006）は，回避動機づけとネガティブな情報への反応性の高さとの関連を示唆している。これらの研究に基づき，本研究では接近－回避気質はポジティブ・ネガティブなバレンスをもつ文字に対する反応性と関連すると考えた。接近気質の高い人はポジティブな意味の文字をより快に評価し，回避気質の高い人はネガティブな意味の文字をより不快に評価すると予測する。

なお，本研究では，接近－回避気質とこれら4つの変数（自尊心・楽観性・人物評価・文字評価）との関連を確認する際に，外向性/神経症傾向と社会的望ましさを統制する。さらに，BIS/BAS尺度日本語版と各変数との関連についても分析を行い，ATQがBIS/BAS尺度と同等のあるいはそれ以上の関連性を示すかどうかを検討する。

方法

調査は2回実施した。1回目の調査では，接近－回避気質，BIS/BAS，外向性，社会的望ましさを，2回目の調査では，接近－回避気質に加えて，情緒安定性，自尊心，楽観性，人物の評価，漢字の評価を測定した。

調査参加者

大学生を対象に，2回の調査を実施した。1回目の調査には268名が参加し，その内欠損値を含む回答者を除いた有効回答者数は262名（男性107名，女性121名，不明34名，平均年齢19.17歳，$SD = 1.10$）であった。2回目の調査は，1回目の調査の2週間後に，同じ参加者を対象にして行われた。両方の調査に参加した参加者のうち，有効回答数は152名（男性61名，女性74名，不明17名，平均年齢19.25歳，$SD = 1.15$）であった。調査は授業時間の一部を利用し集団法で回答を求めた。

尺度

ATQ日本語版　Elliot & Thrash（2010）の全12項目（接近気質に関する6項目と回避気質に関する6項目）からなるATQを日本語に翻訳した。翻訳にあたっては先行研究を参考に，原文の意味を適切に反映すること，自然な日本語表現になることに注意した。その後，心理学を専門とする2名の大学院生，1名

の教員と協議を行い，修正を加えた。さらに，翻訳業者によるバックトランスレーションを行い，原版との対応を確認した。回答は，「全く当てはまらない（1点）」から「非常に当てはまる（7点）」の7件法で求められた。

BIS/BAS　BIS/BAS尺度日本語版（高橋ほか，2007）より，BISに関する7項目（e.g.,「何かよくないことが起ころうとしていると考えると，私はたいていくよくよ悩む」（α = .83）），BASに関する13項目（e.g.,「欲しいものがあると，私はたいていそれを手に入れるために全力を挙げる」（α = .83））の計20項目を使用した。BASには下位尺度が存在するが，本研究では先行研究に基づき，下位尺度を合成して用いた（Elliot & Thrash，2010；Sutton & Davidson，1997；Thrash & Elliot，2004）。「全く当てはまらない（1点）」から「非常によく当てはまる（4点）」の4件法で回答が求められた。

外向性/情緒安定性　簡便な性格測定尺度（水野，2005）より，外向性4項目（e.g.,「初対面の人にも気さくに話しかけることができる」（α = .65）），情緒安定性4項目（e.g.,「いやなことがあってもすぐに気分転換ができる」）を使用した。情緒安定性に関して，内的整合性を低める「気分がころころ変わりやすい」という1項目を除外し，残りの3項目のみ分析に用いた（α = .72）。回答は「全く当てはまらない（1点）」から「非常によく当てはまる（5点）」の5件法で求められた。

社会的望ましさ　バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（谷，2008）より，自己欺瞞に関する3項目（「たとえ何人かの人に嫌われても，私にとって問題はない」，「私は自分の判断をいつも信じている」，「いろいろなことについて，つい余計なことを考える」）を使用した。内的整合性を低める「いろいろなことについて，つい余計なことを考える」を除外し，残りの2項目を用いた（α = .68）。調査の際，「全く当てはまらない（1点）」から「非常に当てはまる（7点）」の7件法で回答が求められた。

自尊心　Rosenberg自尊感情尺度日本語版（桜井, 2000）より，自尊感情の10項目（e.g.,「私は自分に満足している」（α = .89））を用いた。回答は，「いいえ（1点）」，「どちらかといえばいいえ（2点）」「どちらかといえばはい（3点）」「はい（4点）」の4件法で求められた。

楽観性　改訂版楽観性尺度日本語版（坂本・田中，2002）より，楽観性に関する3項目（e.g.,「はっきりしないときでも，ふだん私は最も良いことを期待している」（α = .62）），悲観性に関する3項目（e.g.,「私はものごとが自分の思い通りにいくとはほとんど思っていない（α = .41）），フィラー4項目の計10項目を用いた。悲観性に関する3項目のα係数が低かったため（α = .41），分析には楽観性に関する3項目のみを用いた。回答は，「強くそう思わない（1点）」から「強くそう思う（5点）」の5件法で求められた。

人物の評価　Hamstra et al.（2013）を参考にして作成した。参加者には，ある会社に勤めており，以下のような挑戦的・保守的な働き方の転職採用候補者の情報を聞いたと想像させ，それぞれの人物について好ましさを評定させた。評価には，Hamstra et al.（2013）で使用された項目の内，対象人物の好ましさ，一緒に働くことへの好ましさ，一緒に働きたい程度に関する3項目（α = .92（挑戦的な人物），α = .90（保守的な人物））を本調査での文脈に合うよう一部改変して用い，「全く思わない（1点）」から「非常にそう思う（7点）」の7件法で回答を求めた。

（挑戦的な人物）

Aさんは10年の職歴があり，挑戦的なポジションへつきたいと強く思っています。今は，革新的な会社に雇用され，進歩を重視する業務をとても好ましく思っています。あなたの会社は，Aさんの要求水準を満たしているため，Aさんはそのような環境で働きたいと考えています。Aさんの強みは，野心と精力であり，型にはまらないアイデ

Table 1　*ATQ日本語版の因子パターン*

		1	2	共通性
	接近気質			
11.	何か望むものごとがあると，それを追い求めたいという強い願望を感じる。	**.699**	.063	.504
4.	好きなことができる機会に出くわすと，すぐに興奮する。	**.671**	.095	.476
10.	よいことがあると，それにとても強く影響される。	**.661**	.155	.487
2.	自分が望むものごとについて考えると，本当に元気がでてくる。	**.624**	-.146	.387
5.	ちょっとしたことで興奮してやる気が出る。	**.585**	-.003	.341
8.	いつもポジティブな機会や経験へ，目を光らせている。	**.532**	-.337	.350
	回避気質			
3.	ちょっとしたことで不安になる。	.020	**.752**	.570
7.	よくない出来事に対して，とても強く反応する。	.064	**.746**	.573
6.	不安や恐怖をとても強く感じる。	-.061	**.746**	.548
12.	自分に起きるかもしれない悪い出来事を，容易に想像できる。	.056	**.616**	.392
9.	よくないことが起こりそうになると，逃げたいという衝動に強く駆られる。	.131	**.446**	.231
1.	生まれつき，私はとても神経質な人間だ。	-.074	**.448**	.197
	因子間相関		.13	

アは大切であると考えています。Aさんは目標を達成するためには，リスクをとることを尊重します。さらに，全体像に目を向けることができ，大志を持っています。

（保守的な人物）

Bさんは10年の職歴があり，責任感のあるポジションへつきたいと強く思っています。今は，保守的な会社に雇用され，責任感のある業務をとても好ましく思っています。あなたの会社は，Bさんの職務観に適しているため，Bさんはそのような環境で働きたいと考えています。Bさんの強みは，責任感と正確さであり，ある規定の範囲内で働くことは大切であると考えています。Bさんは目標を達成するためには，規範に従って行動することを尊重します。さらに，細部に目を向けることができ，精密さを持っています。

文字の評価　Ogawa & Suzuki（2004）で使用されていた単語プールより，バレンス（1（非常に快）から9（非常に不快）までの9件法）が高すぎず，低すぎないという基準で，7.5点から2.5点までの単語を選んだ。ポジティブな意味の漢字4単語（善，誠実，良，望（α = .67）），ネガティブな意味の漢字4単語（罪，怒，危，暴（α = .71））の計8単語を用いた。各漢字に対する印象として，「非常に快（1点）」から「非常に不快（9点）」の9件法で回答が求められた。

結果と考察

ATQの因子パターン，信頼性の検討

接近気質・回避気質という2因子構造であるのかを確認するため，1回目の調査のATQ全12項目に対して探索的構造方程式モデリング（Exploratory Structural Equation Modeling: E-SEM）を行った（Table 1）。因子の回転にはoblimin回転を使用した。なお分析にはMplus Ver.7.4を使用した。Kline（2005）にしたがい，データとモデルの適合度の指標として，comparative fit index（CFI），standardized root mean square residual（SRMR），root mean square error of approximation（RMSEA）を用いた。CFIは1.00に近いほど，SRMR，RMSEAは0に近いほどデータとモデルの適合度が高く，CFIは.90以上，SRMR，RMSEAは0から.08の間であることが推奨されている（Kline, 2005）。分析の結果，本研究のモデル適合度は，$\chi 2$（43）= 110.83（$p < .01$），CFI = .925，SRMR = .042，RMSEA = .078，90% confidence interval for RMSEA =［.060, .096］であった。CFI，SRMR，RMSEAの3つの指標において基準を満たしていることから，本研究のデータとモデルの適

Table 2　*ATQ日本語版の尺度の得点，標準偏差，範囲，95%信頼区間*

	得点 (標準偏差)	範囲	95%信頼区間
調査1 (N = 259)			
接近気質	29.40 (5.59)	8 - 42	[28.71, 30.08]
回避気質	27.43 (6.47)	6 - 42	[26.64, 28.22]
調査2 (N = 152)			
接近気質	30.07 (5.36)	16 - 42	[29.21, 30.92]
回避気質	28.24 (6.88)	11 - 42	[27.14, 29.34]

注. 調査1の2週間後に調査2が行われた。

Table 3　*各尺度の相関係数*

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 接近気質 (1)	-								
2. 回避気質 (1)	.04	-							
3. 接近気質 (2)	.69**	-.06	-						
4. 回避気質 (2)	.03	.78**	.06	-					
5. BAS	.66**	.06	.55**	-.01	-				
6. BIS	-.04	.61**	-.11	.65**	.08	-			
7. 外向性	.44**	-.19*	.52**	-.17*	.37**	-.24**	-		
8. 情緒安定性	.20*	-.54**	.20*	-.53**	.09	-.51**	.24**	-	
9. 社会的望ましさ	.08	-.14	.11	-.19*	.21*	-.24**	-.01	.34**	-

注. 接近気質/回避気質の (1) は調査1で, (2) は調査2で測定されたことを示す。
**p < .01, *p < .05

合性は許容範囲内であると考えられる。また，全6項目のα係数は，回避気質が.79，接近気質が.78であり，十分な内的整合性が認められた。以上の結果から，因子構造について先行研究と同様のパターンが示された。

接近気質，回避気質のそれぞれの合計，範囲，95%CIを算出し，Table 2に示した。合計に関して，先行研究の接近気質の合計得点（30.75 − 32.91），回避気質の合計得点（24.05 − 26.26）と比較しても，得点に大きな違いはなく，問題はみられなかった。得点範囲に関しても，本研究と先行研究の接近気質（10 −42），回避気質（6−42）の間で大きな違いはみられなかった。

ATQの再検査信頼性について検討するため，1回目の調査の接近気質・回避気質と，2回目の調査の接近気質・回避気質の相関係数を算出した（Table 3）。その結果，接近気質・回避気質ともに比較的高い相関が認められた。

妥当性の検討

ATQ尺度の妥当性を検討するために，他の変数との関連を調べた。まず，近接した構成概念との関連を検討するため，ATQとBIS/BASの相関係数を算出した（Table 3）。先行研究と同じく，接近気質とBASの間に中程度の正の相関，回避気質とBISの間に中程度の正の相関がみとめられ，併存的妥当性が確かめられた。

さらに，妥当性の検討として他の概念的・行動的な変数との関連を調べるため，接近−回避気質を説明変数とする階層的回帰分析を行った。その際，外向性，情緒安定性，社会的望ましさを統制変数としてStep 1に投入した上で，Step 2に接近−回避気質を投入し，関連性を検討した。さらに，BIS/BASを説明

Table 4　*接近－回避気質と各変数との関連（数値は標準偏回帰係数）*

	自尊心		楽観性		人物の評価				文字の評価			
					挑戦的		保守的		ポジティブ漢字		ネガティブ漢字	
	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]
Step 1												
外向性	.28**	.21**	.15*	.05	.25**	.07	.15	.06	-.19*	-.14	-.07	-.12
情緒安定性	.34**	.10	.56**	.42**	-.06	-.33**	-.15	-.16	-.03	.08	.00	-.06
社会的望ましさ	.22**	.23**	.01	.01	.00	.00	-.01	-.02	-.11	-.12	.01	.01
Step 2												
接近気質		.21**		.27**		.50**		.22*		-.16		.16
		[.06, .36]		[.12, .42]		[.33, .67]		[.02, .42]		[-.36, .04]		[-.04, .36]
回避気質		-.36**		-.16*		-.36**		.03		.14		-.06
		[-.52, -.20]		[-.32, 0]		[-.54, -.18]		[-.18, .24]		[-.07, .35]		[-.28, .16]
R^2	.33**	.43**	.37**	.43**	.06*	.28**	.03	.08†	.05†	.08†	.01	.02
ΔR^2		.10**		.06**		.22**		.05†		.03		.01

注. [　]内は95%信頼区間。

[a)] ステップ1に投入された変数。[b)] ステップ1とステップ2に投入された変数。

文字の評価のポジティブな漢字・ネガティブな漢字の得点は，低いほど快に評価されていることを示し，高いほど不快に評価されていることを示す。

$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

変数，外向性，情緒安定性，社会的望ましさを統制変数とする階層的重回帰分析も行った。接近－回避気質，BIS/BASそれぞれをStep 2に入れた際の$R2$の増分$\Delta R2$の値を比較した。分析の結果をTable 4，Table 5に示す。

第一に，自尊心への回帰係数について，接近気質，BASとの正の関連，回避気質，BISとの負の関連が有意であった。予測と一致して，接近気質，BASが高いほど，自尊心が高く，回避気質，BISが高いほど，自尊心が低いことが明らかとなった。接近－回避気質とBIS/BASで$\Delta R2$を比較すると，両者の間で差は小さく，関連性にはあまり違いがないと考えられる。

第二に，楽観性への回帰係数について，接近気質との正の関連，回避気質との負の関連が有意であった。予測と一致し，接近気質が高いほど楽観的であり，回避気質が高いほど楽観的でないことが明らかとなった。一方BIS/BASとの関連は有意ではなかった。$\Delta R2$に関しても，接近－回避気質の値は有意であるものの，BIS/BASの値は小さく，楽観性に関しては，接近－回避気質の方が，関連性が強いことが示唆された。

第三に，人物の評価について，接近気質，BASと挑戦的な人物の好ましさとの正の関連が有意であった。また，回避気質と挑戦的な人物の好ましさとの負の関連が有意であった。この結果から，接近気質，BASが高いほど，挑戦的な人物を好ましく思い，回避気質が高いほど好ましく思わないことがわかる。しかし，保守的な人物の好ましさとの関連に関しては，回避気質との関連は有意ではなく，接近気質との正の関連が有意であった。予防焦点と保守的な人物の評価は正の関連を示すという先行研究から，本研究は回避気質と保守的な人物の評価の間に正の関連があると予測していたが，本研究の結果はその予測とは反していた。これは，挑戦的な人物の評価（$M = 4.95$）と保守的な人物の評価（$M = 5.32$）が中点を上回り，さらに両者の間には中程度の正の相関（$r = .35, p < .001$）があったためであると考えられる。つまり，保守的な人物も挑戦的な人物と同様に好ましい印象を与えていた。接近気質の高い人は全般的にポジティブな刺激に反応する傾向があるため，好ましい印象を与えるどちらの人物に対しても評価が高くなったと考えられる。なお，$\Delta R2$に関して，接近－回避気質の方がBIS/BASの値よりも高く，人物の評価に関しても，接近－回避気質の方が，BIS/BASよりも関連が強いと考えられる。

Table 5　*BIS/BASと各変数との関連 (数値は標準偏回帰係数)*

	自尊心		楽観性		人物の評価				文字の評価			
					挑戦的		保守的		ポジティブ漢字		ネガティブ漢字	
	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]	β[a)]	β[b)]
Step 1												
外向性	.28**	.18*	.16*	.12	.26**	.14	.16†	.15	-.22*	-.18†	-.06	-.08
情緒安定性	.33**	.21*	.56**	.54**	-.05	-.10	-.15	-.07	-.01	-.03	.00	.04
社会的望ましさ	.24**	.16*	.03	.00	-.02	-.10	-.04	-.03	-.11	-.08	.02	.00
Step 2												
BAS		.18*		.11		.28**		.07		-.14		.09
		[.03, .33]		[-.05, .27]		[.09, .47]		[-.12, .26]		[-.34, .06]		[-.11, .29]
BIS		-.32**		-.05		-.13		.19†		-.04		.08
		[-.48, -.16]		[-.21, .11]		[-.33, .07]		[-.01, .39]		[-.25, .17]		[-.13, .29]
R^2	.34**	.42**	.39**	.40**	.06*	.13**	.04	.08†	.06†	.08†	.00	.02
ΔR^2		.08**		.01		.07*		.04†		.02		.02

注. [　]内は95%信頼区間。
[a)] ステップ1に投入された変数。[b)] ステップ1とステップ2に投入された変数。
文字の評価のポジティブな漢字・ネガティブな漢字の得点は，低いほど快に評価されていることを示し，高いほど不快に評価されていることを示す。
$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

第四に，漢字の評価に関して，ポジティブな漢字の評価と接近気質の関連性は予測と一致する方向であったものの有意ではなく（$p = .103$），ネガティブな漢字の評価と回避気質の間にも有意な関連はみられなかった。また，漢字の評価とBIS/BASの間にも有意な関連はみられなかった。これらの結果は，本研究で用いたポジティブな漢字・ネガティブな漢字の快・不快のバレンスがやや高かったことにより生じた可能性がある（それぞれ，$M = 2.32$，$SD = 0.90$と，$M = 7.51$，$SD = 0.96$）。単語の補完や再生という刺激の検出に焦点を当てている先行研究（Gomez & Gomez, 2002; Rusting & Larsen, 1998）に対して，バレンスのある刺激の評価に焦点を当てた本研究では，刺激の評価に差がつきにくかったのかもしれない。本研究はバレンスが高すぎず，低すぎないという基準で漢字を選定したが，さらにバレンスを下げ，評価の分散がより大きくなるような漢字を用いて，接近－回避気質との関連を再検討する必要があるだろう。

本研究の意義

本研究では，ATQ日本語版を作成し，信頼性と妥当性を検討した。本研究の意義の一つは，Elliot & Thrash（2010）と同様の因子的パターン，併存的妥当性を確認した点にある。ATQ日本語版の項目は，原版の項目の意味を正しく反映できており，日本でも接近気質，回避気質という2つの重要な気質を測定できる尺度が完成したといえる。もう一つの意義は，妥当性の検討としてATQと，自尊心，楽観性，人物の評価，文字の評価との関連について検証し，BIS/BAS尺度との関連と比較した点である。先行研究では，達成目標や成績との関連が検討され，学習面に焦点があてられていた。本研究では，自尊心・楽観性との関連が確認され，学習面以外の変数との関連が明らかとなった。また，行動的な変数との関連として，文字の評価との関連はみられなかったものの，人物評価との関連がみられた。ATQと他の変数との関連性を，自己報告面・行動面の双方から証明することができたといえる。また，人物の評価，楽観性に関して，$\Delta R2$はATQの方がBIS/BAS尺度よりも大きく，それらの変数とより強く関連していることも示された。単一尺度である点，12項目であり項目数の少ない点を考慮に入れると，20項目であるBIS/BAS尺度と比較して，ATQはより実用的であるといえるだろう。

接近－回避気質は，外向性/神経症傾向，ポジティブ情動性/ネガティブ情動性，BIS/

BASといったパーソナリティの中核にある，最も基本的な気質である（Elliot & Thrash, 2002, 2010）。本研究によって，ATQ日本語版が高い信頼性と，妥当性を備えていることが示された。今後，さまざまな領域の研究において，パーソナリティの影響を統制する場合，ある独立変数の効果がパーソナリティによって調整される可能性を検討する場合，ATQは最も有効な尺度の1つとなるだろう。

文献

Carver, C. S., Sutton, S. K., & Scheier, M. F. (2000). Action, emotion, and personality: Emerging conceptual integration. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **26**, 741-751.

Elliot, A. J., & Thrash, T. M. (2002). Approach-avoidance motivation in personality: Approach and avoidance temperaments and goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 804-818.

Elliot, A. J., & Thrash, T. M. (2010). Approach and avoidance temperament as basic personality dimensions. *Journal of Personality*, **78**, 865-906.

Eysenck, H. J. (1981). *A model for personality*. New York: Springer Verlag.

Gable, S. L., Reis, H. T., & Elliot, A. J. (2000). Behavioral activation and inhibition in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology,* **78**, 1135-1149.

Goldsmith, H. H., Buss, A. H., Plomin, R., Rothbart, M. K., Thomas, A., Chess, S., Hinde, R. A., & McCall, R. B. (1987). Roundtable: What is temperament? Four approaches. *Child Development*, **58**, 505-529.

Gomez, A., & Gomez, R. (2002). Personality traits of the behavioral approach and inhibition systems: Associations with processing of emotional stimuli. *Personality and Individual Differences*, **32**, 1299-1316.

Gray, J. A. (1987). *The psychology of fear and stress* (2nd ed.). New York: Cambridge University Press.

Hamstra, M. R. W., Van Yperen, N. W., Wisse, B., & Sassenberg, K. (2013). Like or dislike: Intrapersonal regulatory fit affects the intensity of interpersonal evaluation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **49**, 726-731.

Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.

Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.

Kline, R. B. (2005). *Principles and practices of structural equation modeling* (2nd ed.). New York: Guilford.

水野邦夫.（2005）. 簡便な性格測定尺度の作成について: 性格の5因子モデルをもとに. *聖泉論叢*, **13**, 13-23.

Ogawa, T., & Suzuki, N. (2004). On the saliency of negative stimuli: evidence from attentional blink. *Japanese Psychology Research*, **46**, 20-30.

尾崎由佳・唐沢かおり.（2011）. 自己に関する評価と接近回避志向の関係性: 制御焦点理論に基づく検討. *心理学研究*, **82**, 450-458.

Rusting, C. L. (1998). Personality, mood, and cognitive processing of emotional information: Three conceptual frameworks. *Psychological Bulletin*, **124**, 165-196.

Rusting, C. L., & Larsen, R. J. (1998). Personality and cognitive processing of affective information. *Personality and Social Psychological Bulletin*, **24**, 200-213.

坂本真士・田中江里子.（2002）. 改訂版楽観性尺度（the revised Life Orientation Test）

の日本語版の検討. *健康心理学研究*, **15**, 59-63.

桜井茂男.（2000）. ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. *筑波大学発達臨床心理学研究*, **12**, 65-71.

高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁桝算男・大野　裕・安藤寿康.（2007）. Grayの気質モデル: BIS/BAS尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討. *パーソナリティ研究*, **15**, 276-289.

谷 伊織.（2008）. バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（BIDR-J）の作成と信頼性・妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, **17**, 18-28.

Strachman, A., & Gable, S. L. (2006). What you want (and do not want) affects what you see (and do not see): Avoidance social goals and social events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 1446-1458.

Sutton, S. K., & Davidson, R. J. (1997). Prefrontal brain asymmetry: A biological substrate of the behavioral approach and inhibition systems. *Psychological Science*, **8**, 204-210.

Tellegen, A. (1985). Structures of mood and personality and their relevance to assessing anxiety, with an emphasis on self-report. In A. Tuma & J. Maser (Eds.), *Anxiety and the anxiety disorders* (pp.681-706). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Thrash, T. M., & Elliot, A. J. (2004). Inspiration: Core characteristics, component processes, antecedents, and function. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 957-973.

Tooby, J., & Cosmides, L. (1990). The past explains the present: Emotional adaptations and the structure of ancestral environments. *Ethology and Sociobiology*, **11**, 375-424.

Updegraff, J. A., Gable, S. L., & Taylor, S. E. (2004). What makes experiences satisfying? The interaction of approach-avoidance motivations and emotions in well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**, 496-504.

付記

本研究は，JSPS科研費（基盤研究（C）課題番号 15K04092，新学術領域研究 課題番号 16H06406）の助成を受けて行われた。

受稿：2017年6月7日
受理：2018年1月9日